記念講演

辻村深月さんによる記念講演「フィクションの向こう側 ―小説家という仕事について」

今年の記念講演はデビュー10 周年を迎える辻村深月さん。講演はインタビュー形式で行われました。司会は埼玉県立川口北高等学校の小池由美子教諭、インタビュアーとして、埼玉県立春日部女子高等学校の金子彩夏さん、篠崎加奈さん、駒澤大学の堀岡萌さんの３人が壇上にあがり、辻村さんとの質問形式で、トークセッションが始まりました。

辻村さんは最初の御挨拶の中で、埼玉県との思い出について触れられました。山梨県が御出身の辻村さんは、大学入学まで県外に出ることがほとんどなかったそうです。埼玉県は、実は高校時代に初めてお友達とともに県外にお出かけした思い出の場所。当時からファンだった京極夏彦先生のサイン会が埼玉県で開催されることを知った辻村さんは、お友達と一大決心をして埼玉に来県。サインをもらった後も会場でずっと京極先生を見つめていたそうです。そんなエピソードの御披露から、インタビューが始まりました。

Q：辻村さんは小学校の時に、どんなお子さんでしたか？
辻村さん：小学生の時から本が好き。気がついたら漫画から小説まで何でも好きでした。当時は巡回するワゴン車の移動図書館から本を借りていました。小学校の図書室は広大な森に感じられた。そこでミステリーやホラーとの出会いがありました。

Q：人生観を変えた本や好きな作家を教えてください。
辻村さん：京極夏彦先生や綾辻行人先生の本です。好きな作家の新刊が出るまでの間を楽しみに、日々を送っていた気がします。

メフィスト賞を受賞してデビューが決まった時に会いに行った編集者の方が、ちょうど京極先生が直木賞をとられたお祝いをされたばかりだと言っていて、ああ、憧れていた作家さんとお仕事をしている人とこれから自分の本を作ることができるのかと、身の引き締まる思いでした。京極先生のサイン会のために上京した話は「十七歳のサイン会」というタイトルでエッセイとしても書いています。（オール讀物 2012 年 9 月号）

Q：作家になろうと思ったきっかけはなんですか？
辻村さん：小学生の時から物語を読むことがとても好きで、本をたくさん読んでいました。根がまじめなのか（笑）宿題を終えてから小説を書くような感じ。私が小説を書き始めたのは、遊び（好きなこと）の延長という感覚であまりそのために努力したという認識はありません。

大学を卒業した後は就職し、働きながら小説を書いていました。書きたい衝動が衰えなかったのは、自分にとって書くことがそんなふうに遊びや楽しみの延長にあったから、就職したことも回り道ではなかったと思っています。尊敬できる方とも出会えましたし、仕事が自分を大人にしてくれたと感じています。

Q：アイデアはどうやって生まれるのですか？
辻村さん：その時々によって違いますが、例えば死者と生者が一度だけ再会できる『ツナグ』（新潮社）を書いた時は、多くの人が望むけれど叶わないことを小説だからこそできるのではないか、と考えたことがきっかけになりました。

私の書く作品には、ちょっと不思議な設定もあるのですが、いかに小説であっても、何でもありにしてしまうのは抵抗があります。

現実では起こりえないことを書く時こそ、設定にルールを用いたり、リアリティを出すことを心がけています。

私の話にこういう不思議の設定が多いのはなぜなのか考えてみると、私は「ドラえもん」が好きなんです。作者の藤子・F・不二雄先生の言葉に「SF＝スコシ・フシギ」というのがあるのですが、この「スコシ・フシギ」の感覚がしっくりきているのだと思います。

「ミステリー＋スコシ・フシギ」がパソコンの OS のように自分の中にインストールされて、それを使って小説を書いている気がします。

Q：作家として仕事をしていく上で大切なことを教えてください。
辻村さん：作家になって辛かった時期は、2作目『子どもたちは夜と遊ぶ』（講談社）を書いていた時。デビューして、本ができて、すごく嬉しくて、そんなところに次の話をと言われ、多くの人に受けいれられるものを、と考えたらどっちを見たらいいのかわからなくなってしまった。どっちが岸か分からず難破した気分でしたが、担当の編集者さんに、「自分にとって一番大切な読者が１人胸にあればいい」と言われ、はっとしました。これまでその「読者」に特定の人を設定していませんでしたが、最近それって 10 代の頃の自分自身なのではないかと思い始めました。一番本を読むのが好きだった頃の自分に軽蔑されない、できたら尊敬されるような仕事がしたいと心がけています。

辻村さんのお人柄もあり、会場は始終なごやかで笑いに包まれていました。インタビュアーとして登壇した３人も最初は緊張していましたが、司会の小池教諭の進行にも助けられ、笑顔でお話を聞いていました。

辻村さんからも、「皆さんに集中して聞いていただけてうれしい。まるでクリスマスプレゼントをもらったよう」とお誉めの言葉をいただき、講演会は無事に終了しました。

講演を聴かれた方々からは、「いろいろなエピソードや作品への思いなど直接聴くことができ、感激しました。」、「あっという間でした。とても楽しかったです。」や「素晴らしい講演会でした。ありがとうございました。」など多くの御感想をいただきました。

辻村深月さん、大変お忙しい中、貴重なお話をいただき、ありがとうございました。